第７回（令和５年度第７回）府中市生涯学習審議会会議録

１　日　時　令和６年２月２７日（火）午後３時～５時

２　場　所　おもや４階　第１特別会議室

３　出席者（敬称略）

⑴　委員１３名

池田和彦委員、市村忠司委員、上野和憲委員、榎本成子委員、佐野洋委員、白信康委員、関川けい子委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、長畑誠委員、中村洋子委員、福田豊委員、渡邊和子委員

※　今関紘二委員、江崎章子委員　欠席

⑵　職員６名

佐藤文化スポーツ部長、鈴木文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、武居生涯学習係長、竹川事務職員、山本事務職員

４　報告事項

⑴　配布資料の確認

ア　資料１　第６回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ　資料２　令和５年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員研修会配布資料（抜粋）

ウ　資料３　令和５年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第２回理事会資料（抜粋）

エ　資料４　これからの生涯学習を支える「公共」の役割について　中間答申

オ　資料５　検討にあたっての視点

カ　資料６　社会教育（学習）関係団体について

キ　資料７　文化センターについて

ク　資料８　令和４年度文化センターの実績

ケ　資料９　府中市文化センターのあり方に関する基本方針（抜粋）

⑵　前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

⑶　令和５年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員研修及び令和５年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第２回理事会について、参加した委員から報告があった。

５　審議事項

⑴　「これからの生涯学習を支える『公共』の役割について」

会長：　審議に入る前に審議内容と配布資料について、事務局から説明がある。

事務局：　令和５年は文化・スポーツ施設配置等適正化計画の策定に伴い、今後の生涯学習を支えるために必要な機能・設備について審議し、中間答申としておまとめいただいた。令和６年は、中間答申の３「府中市の生涯学習が抱える課題」の２～４を基にしながら、この課題を解決し、機能・設備を生かしていくために生涯学習センターはどのような役割を担っていくべきか、また、市民の方の「学びたい」という意欲に対してどのような事業や体制で支援をしていくべきか、「公共」の役割のソフト面についてご審議いただきたい。

また、生涯学習センターは、将来的には体育機能と学習機能を切り離し、学習機能を中心市街地に移転するという方向性が示されており、現在、中央文化センターとの補完・連携の可能性も合わせて検討されている状況である。

このため、将来的な生涯学習センターと文化センターの関わり方についても、それぞれの違いや連携方法、事業の実施体制、事業内容など、様々な観点からご意見いただき、最終的に答申としておまとめいただきたい。

続いて、配布資料について、説明をさせていただく。

まず、資料４「これからの生涯学習を支える「公共」の役割について中間答申」こちらは、令和６年１月３０日に正副会長から教育長に提出された中間答申である。令和６年の審議の基となるため、ご確認いただくようお願いしたい。次に資料５「検討にあたっての視点」こちらは検討にあたっての基本的事項や審議の方向性、審議するうえでのキーワードについて記載している。また、裏面には生涯学習・社会教育に関する法令についてまとめている。次に資料６「社会教育（学習）関係団体について」こちらは、令和５年度の社会教育（学習）関係団体についてまとめたものである。社会教育関係団体の登録には各文化センター登録と文化生涯学習課登録がある。左側が文化センター登録の団体となっており、基本的にその文化センターを主な活動場所としている。右側は文化生涯学習課登録の団体で、その中で主な活動場所を「中央文化センター」、「生涯学習センター」としている団体をさらに分けている。なお、この数には重複をしている部分もある。下に内容別で分類したものと、社会教育関係団体についても記載している。次に資料７「文化センターについて」こちらは文化センターについて、まとめたものである。文化センター施設利用のご案内は一般

団体用と市登録団体（主に社会教育関係団体）となっており、違いとしては、金額や受付期間となる。また、中央文化センター内施設ということで、市ホームページに掲載しているものを配布している。生涯学習センターとの比較の参考にしていただきたい。次に資料８「令和４年度文化センター実績」こちらは、令和４年度に文化センターで行われた事業の実績である。３，４枚目が中央文化センターに関するものとなっている。どのような事業が行われているか、役割などを検討する際の参考にしていただきたい。最後に資料９「文化センターのあり方に関する基本方針（抜粋）」令和３年度から４年度にかけて文化センターあり方検討協議会が基本方針としてまとめたもので、資料８と内容が重複している部分はあるが、文化センターで行われている内容についての参考にご利用いただきたい。簡単ではあるが、配布資料の説明は以上となる。

会長：　資料５は中間答申のその後の内容をどうしていくかについて正副会長と事務局で検討した内容をまとめたものである。そのため、まずは委員の皆さんと中身の確認をしてから進めていきたい。審議の前提は昨年からの継続で、２０～３０年後を見据えていく。生涯学習センターが中心市街地に移り、中央文化センターと近くなるという方向性が出ているため、そのことに役に立つような長い視点で見ていく。一方で、前回まではハード面を中心に必要なことを挙げていったが、今年は主にソフト面について焦点を当てていく。当然のことであるが、生涯学習センターというものを府中市の生涯学習の拠点として充実させていくことが我々の審議の目標である。中間答申の中で府中市が抱える生涯学習の課題を挙げており、なおかつその（２）～（４）については、中間答申では深く扱わず、次の年に持ち越すことを記載しているため、主な審議の論点としてはこの３点になることはご承知いただきたい。そして審議の方向性であるが、全てに共通するキーワードは学びのコミュニティの活性化であると考えた。つまり、我々が考えていくべき中心である生涯学習センターと地域の拠点である文化センターは、人々が集まって学ぶということに特徴がある。府中市独自の学び返しという考え方もそうであるが、学びたい人、学んだことを地域などに返したい人がともに集まって学んでいくという場を府中としてどれだけ作っていけるかが、生涯学習としてのこれからの大きな鍵になってくると考えている。その時に、考えなくてはならないことが２つある。１つ目は、地域ごとのつながりに根ざした形での学びのコミュニティの話、２つ目は、地域ではなく、テーマごとに関心がある人が全域から集まってくることである。そのような学びのコミュニティを活性化していくことも視野に入れる必要がある。つまり、学びのコミュニティと言っても地域ごとの話もあれば、より広く全市を対象と

して、テーマごとという話もある。このような学びのコミュニティの活性化に生涯学習センターはどのような役割をどうやって果たしていくことができるかについて審議していきたい。これらの点が審議されていくと、（２）～（４）の部分も見えてくる。（２）～（４）もそれぞれ課題として挙がっているが、そもそもなぜ課題なのかが書かれていない。その点こそがまさに地域のコミュニティを活性化させることであり、それが市の公共の役割として考えていくべきであるので、その点について審議をしていきたい。

委員：　配布資料５の真ん中で多様な施設として各施設の名前が列挙されている。この部分について、中間答申では府中の森芸術劇場が入っているが、この資料では入っていないのは何か理由があるのか。

会長：　おそらく中間答申から書き出す際に抜けてしまった。芸術劇場も大事な施設であるし、我々が見るべきは中間答申である。

委員：　（２）について、長い視点で話すということと、この審議会に参加している責任から発言させていただく。以前から言っていることであるが、生涯学習施設の拠点として図書館が前全面的に出ていないのが不思議である。どの文書を見ても、生涯学習の拠点として図書館は最初か２番目には出てくるものである。資料５の裏面の教育基本法にも図書館は最初に書かれている。その他、様々な資料を見ても生涯学習の施設的拠点として図書館は最初か２番目に出てきているのに、我々が答申する内容では、かなり後ろになってしまっている。例えば、生成ＡＩに、府中市においてどのような公共施設が必要かと聞くと、図書館は早い段階で出てくる。これからの長い視点で府中市の生涯学習を考えていくとなると、生涯学習センターとは別の軸として図書館を据えないのは不思議である。前回から組織的な困難さがあるという説明はあり、その点については納得しているが、そこを超えようという努力を市としてもする必要があるのではないか。私のイメージとしては、将来的な拠点として、図書館と生涯学習センターの２つの軸で考え、どう連携していくかを考えていくのが府中市の独自の体制につながるのではないかと考えている。

会長：　おっしゃっている点はその通りである。生涯学習、社会教育は、生涯学習センターに限らずあらゆる場所で行われており、その中でも図書館というのは、これまで蓄えてきた知の集積場所である。それをどのように活用して学びのコミュニティを活性化していくのかという点は重要なことである。図書館に限らず学校や市民活動センターなどとの連携に関する意見も出ていいと考えている。

委員：　今の生涯学習センターは室内プールを備えている。移転に伴って体育機能と学習機能は切り離されるとのことだが、そのプールの代替施設のようなものはあるのか。

事務局：　調布市との境に武蔵野の森総合スポーツプラザがあり、屋内プールを有している。また、府中基地跡地留保地の活用について、新総合体育館を建設することは決まっているが、機能や設備については今後、基本構想を検討すると聞いている。そのため、現段階において市として室内プールを保持するかについては全くの白紙である。

委員：　審議の方向性でコミュニティという言葉が出てきているのは、共感出来る点であるが、前期の審議会ではコミュニティスキルを強化するという方向性を出すべきという答申をしたかと思う。何のためにやるのかが大切であると会長からあったが、学びというのは問題解決の手段であるというのも前期の審議会で話したことである。そうだとすると、コミュニティというのは、学びのコミュニティを活性化させるばかりではなく、地域のコミュニティを活性化させる学びとは何かという点にもつなげていった方がこれまでの審議会の議論と継続する部分もあり、問題解決の学びという視点も引き継がれていく。

会長：　地域に根差したという点については、まさに地域が抱える様々な課題にどのように地域住民や行政が一緒になって取り組んでいくかということも重要である。学びはもっと楽しいものでいいと考えているので、この部分ではあえてそこまで記載していないと考えていただきたい。地域の歴史や文化など、自分が暮らしていて楽しいとか、誇りが持てるとか、そういったものを持って生きていけるのが大事だと思っている。そのような人たちがいて、そこから地域課題の解決に向かっていくのではないか。広い意味での学びとして捉えていただければと思う。

委員：　私自身コミュニティ活動をしているが、どこの自治会を見ても、参加者が減少し、消滅寸前の自治会が多くある。深刻なコミュニティの衰退を目にしているため、このままでは、社会そのものが機能しなくなる懸念がある。そのため、実際のコミュニティに対しても学びが有効であるという観点があればいいと思う。

委員：　町内会で見ても脱退しているところは確かにある。高齢化はもちろんあるが、若い世代の意識が低くなってしまっていることも多い。

委員：　若い世代の方たちは、地域に貢献したいという気持ちはある。しかし、具体的に地域にどう関与していくかという点については思っているよりインセンティブが無くて、面倒くさいという思いが強くなってしまっている。他の自治会に聞いても一番の悩みはそこである。

委員：　子ども会も人が出せないなどの理由で無くなってしまう地域もある。祭り自体は行っているが、子どもたちを集める場所が無くなってきてしまっている状況である。

委員：　若い世代を取り込むためでもあるが、ＬＩＮＥ回覧板やデジタル町会などの取組を未来への投資だと思って積極的に行なっている。

会長：　本日は、審議の方向性でも書いている①について焦点を絞っていきたい。府中でいうと文化センター単位で考えていくことになるかと思う。地域に根差した学びのコミュニティをどう活性化するかについて考えていく中で文化センターの役割と全体の拠点である生涯学習センターの役割についてこれから皆さんと考えていきたい。

委員：　地域の根差した学びのコミュニティとは具体的にはどういったことをイメージすればいいのか。

会長：　今あるものを前提にしていきたい。今後新しい意見も出てくるだろうが、今あるものがどういったものかというところから出発をしていく。そのために資料を確認していきたい。資料７はあくまでも文化センターの施設の話であるため各自でご覧いただきたい。資料８が文化センターでどういったことを行なっているかについてまとめられているものである。１，２枚目は全文化センターの実績で、３，４枚目が中央文化センターの実績である。各文化センターだと数が多いので、今年は、今後、生涯学習センターとの統合などが検討されている中央文化センターに焦点を当てている。そして資料６であるが、これは社会教育関係団体の体系図で、中央文化センターで活動している団体は計２００団体ほどある。各住民の人たちが行なっている活動が資料６で、文化センターが主催で行なっているものが資料８に載っていると考えていただきたい。資料８で、コミュニティ圏域内地域交流促進事業で中央文化センターでは１２事業がある。そもそもコミュニティ協議会とは何か。

委員：　文化センター圏域に所属している町会、自治会、自主グループの会長や役員が集まって情報交換や地域の運営を話し合う機関である。

会長：　次にコミュニティ事業、自主活動奨励事業、地区公民館事業はそれぞれ、文化センターが主催となって企画、運営して行なっているものである。最初のコミュニティ協議会委託事業は地域の交流を図るようなものの印象がある。その他は文化センターが主催となって行なっているという理解でいいかと思う。文化センターというのが、地域の学びの拠点としてどういったことを行なっているのかを把握してもらうための資料である。また、文化センターと生涯学習センターの利用状況を調べてもらった。文化センターは稼働率が高いが、生涯学習センターについては、音楽系は高いがその他はそれよりも低い傾向にある。イメージとしては、文化センターは福祉系のものや避難所もあるが、文化センターには文化センターが主催となっている学びの講座、自主グループの活動の場、コミュニティ協議会に委託して実施しているものがある。

委員：　実際に文化センターで活動している者からすると、今の説明を聞いても文化センターが学びのコミュニティであるというのがよくわからない。イベントや遊びなどの企画であって、学びはどこにあるのか。また、これを活性化するというのは、どういったことなのか。意欲的にやっている人はいて、その点では活性化できているが、これを活性化させるということはメンバーをさらに拡大していくために頑張ってもらうのか、あるいはもっと違う文化活動を企画してくださいということなのか、その点がわからない。

委員：　私は、片町文化センターで活動しているが、高齢化のためか人数が少なくなってきている。どうしたら人を増やせるかが悩みである。カラオケの団体も減ってきている。先日、各文化センターで活動している団体が集まり成果を披露するコミュニティ文化祭があったが、それもまた人数が少なくなってきてしまっている。どうすれば、人を増やしていけるかを考えていきたい。

会長：　今は稼働率などの数字でしか見られていない。部屋を使っている人達はそれぞれが学びを行なっている。貸館機能としての利用率は高いが、部屋を利用する人が減ってきているというのは問題の一つかと思う。

委員：　カラオケや舞踊で参加者が少なくなってきているという話であった。これは、主催している人には悲しい話かもしれないが、それを継続しなければいけないという必然性はあまり無く、同好者が集まって自由に出来るということが重要である。必ずしも人を増やさなければいけないということでもない。

会長：　ただ、活動している人が増やしたいと思っていても増やせないというところは問題である。

委員：　若い世代の人はやはり興味がなかったり、面倒だと思っている人が多いのかもしれない。

会長：　一定数の今まで使っていた人たちがそのままその場所を使っているが、新しい層がそこを使うような活動をしていないということかもしれない。

委員：　それでも予約は取りづらい。中央文化センターは活動している団体も多いため、他の文化センターよりもさらに予約が取りづらいようである。

会長：　部屋の予約は取れないが、その部屋を使っている人達の活動が衰退していて、人が減ってしまっている現状がある。

委員：　ただ、日中は活動している団体が多くても、夜間は少ない傾向にある。

会長：　先ほどの話でもあったが、若い世代の人が地域の興味を持たなくなり、文化センターを拠点に活動しようと思わなくなってきている。

委員：　有り体に言えば、それを活性化させる必要はあるのかということである。

委員：　それを無くしたくないのであれば、みんなで納得して増やしていかなければいけない、

会長：　地域での学びのコミュニティがあった方がいいということを前提に話を進めているので、それが無くなってしまったら地域がより衰退していってしまう。学びが入り口になって様々な活動につながっていくこともある。

委員：　例えば、カラオケ集会のために部屋を予約すること、それは学びと言えるのか。

会長：　貸館機能の利用状況の中にはそこまで書いていないので、実際のところは分からない。真剣に学習会をやっている団体もあるはずなので、そこは分けて考えていただきたい。

委員：　発表するような団体は定期的に利用するものである。そのため、活性化するとなるとそういった場面を作るのが方法の一つである。

会長：　生涯学習センターでは、生涯学習フェスティバルなど、発表の機会はあるが、確かにその通りである。

委員：　文化センターでは、敬老の集いや、新春の集い、文化祭などのプログラムを組んでおり、必ず発表の場を設けている。ただ、集まる人は大体同じ方たちである。

委員：　文化センターのお祭りでも見に来ている人が数人だったりしていて、発表する側としては寂しいものである。

委員：　桜まつりでも出店している団体を見ると、活発なところとそうでないところがわかる。中央文化センターは地域文化センターではないのか。

会長：　名前が中央となっているだけで、地域の文化センターである。

委員：　ということはそれをまとめるのは生涯学習センターになるのか。

会長：　まとめるというより、市全体の拠点は生涯学習センターである。今出てきている話としては、１つは、文化センターの貸館機能で場所を使っている団体は多くて予約を取るのが大変だが、使っている人からすると減ってきて新しい人が入ってこない現状があること。もう１つは、文化センターが主催している事業、コミュニティ事業、地区公民館事業について、これでいいのかということ。親子や子どもに焦点を当てている講座が多い印象がある。

委員：　年代的に違うものがある。今の８０代にしても聴いてきた音楽も違うので、やはりそこは無理がある。

会長：　そこは今の生涯学習センターの方が頑張っている印象がある。今よりも若い世代の人たちに入ってもらおうとしたときに、文化センターがあるということを知らないと来ない。そういう意味では、文化センターで行っている主催事業をもう少し変えていく必要があるかもしれない。

委員：　やはり、中身に手を入れないと難しい。子ども向けの事業をやるのにも理由がある。文化センターが主催しているが、講師は探しながら

進めていくわけである。地域の中で読み聞かせをやってくれるような若いお母さん層のリーダーが欲しいが、子どもがいて、家庭があると継続は難しい。子育て層を狙っていくと途中で下火になってしまう要因になる。かといって若い世代の男性に焦点を当てて何をやるかと言っても文化センターになじまないものになってしまい中々難しい。そうなると、今まで話してきたようなリスキリングといった話になってしまう。ただ、リスキリングは自分で考えてやるようなものという節もある。そのあたりについて文化センターとしてどこまで手を出すことができるか、それとも生涯学習センターでプログラムを組んで文化センターでもネットやアーカイブで見られるようにするのか。ただ、そうするとわざわざ行かなくても自宅で見ればいいということになる。文化センターが若い人たちの学びの中に入り込んでいく難しさはあるし、世間的には競争が激しいので、文化センターで太刀打ちできるかということもある。

会長：　若さの定義にもよるが、５０代になるとその先のことを考え始めてくる頃かと思う。４０代ではまだ仕事もこなしていて、子育てもある。そういった子育ての中でのつながりはあってもそれは段々無くなってしまう。しかし、５０代になると自分の老後を考えるようなときにもう一度地域に目を向ける人は出てくるのではないか。そこの部分の人に合致していないのではないかと考えている。

委員：　５０代で文化センターに行くのはまだ早いと思うのではないか。文化センターの掲示板を見ると、体操教室や生け花、子どもの〇〇など高齢者か子ども向けのものが大半で、男の料理教室、そば打ち体験が少しあるぐらいのものである。やはり中身に手を入れていく必要がある。例えば、先ほどの話に出ていた自治会の会員数を増やすにはどうすればいいかなどの方が学びになるかもしれない。

委員：　中身だけでなく見た目も大事である。Ｗｉ−Ｆｉはロビーしかなくて、建物自体が古くあまり行きたいとは思わない。明るくテクノロジー的なものがあると若い世代も来るようになるかもしれない。

委員：　名称も文化センターではなく若い世代に寄った名称にしていくのがいいかもしれない。今は住宅も高層化しており、横のつながりがほとんどない。また、中心市街地は高層化しているが、その他の地域は高さ制限などで居住者が増えない。そういったところに文化センターはあるが人が少ない。中央と四谷、押立などを比べるとその違いは明らかである。

会長：　同じ府中市内でも違いが出てきてしまっている。

委員：　押立は団地があり、二千戸近くあって、その中で一つのかたまりができている。その歴史としては、建設に対して地元から反対があった団地であるので作った時から地元の地主とは軋轢があったと聞いている。そういったこともあって団地の人はその中で活性化せざるを得なかった。特に子ども会については軋轢が深かったため活性化していったと聞いている。ただ、今は西武住宅の戸建て住宅エリアが高齢化していて、交通、買い物難民で大変な状況である。ささえあい協議会が買い物や通院のお手伝いをしているケースが多い。しかし、自治会として活発かというとそうでもないようだ。個人では困りごとがあるが、文化センター開催の「困りごと相談会」や自治会単位に（相談したり、解決したり）はなっていない印象を持っている。

委員：　文化センターを利用していてありがたいのは図書館の分室があることである。図書館に資料を予約すると分室まで本が来てすぐに受け取れるので非常にありがたい。

会長：　貸館機能でも住民の自主グループの活動が段々と高齢化などで衰退している点と、文化センターが主催している事業でも新しい世代が参加しにくいものや、学びたいと思えるようなものをやっていないということは言えるかもしれない。他にも課題はあるかもしれないが、そうした時に生涯学習センターは何ができるのかという視点でご意見をいただきたい。文化センター自体を変える必要は確かにあるかもしれないが、そういった課題を抱えている文化センターに生涯学習センターは何ができるか。配信の話が出たが、一番に思いつくのは出前講座などである。

委員：　ニーズが掴みづらいことを考えると、リクエスト講座と称して何が欲しいかを聞けば何か出てくるかもしれない。有名な人を呼んでくれと言われても実現は難しいかもしれないが、もし呼べるのであれば、それを各文化センターや自宅、老人ホームの広間などで見られるようにしたりすることもできる。生涯学習センターはもっと外向きに自分から出ていかなくてはいけない。

委員：　最近の生涯学習センターの講座のチラシは雰囲気が明るくなった印象があるし、情報発信もＳＮＳを利用しており、努力している印象がある。

委員：　スマートフォンの使い方講座を社会福祉協議会で行なっており、受講率がいい。受講した５人～６人でグループラインを練習として作り、写真を撮って報告したりすることで府中の事を知ることができたり友達ができたりしているようである。

委員：　東京都が補助金を出してスマホ教室を地域ごとに行なっている。私の自治会も補助金をもらって高齢者スマホ教室をこれまでに３回ほど行なっているが、今のお話ほど受講者数は多くない。

委員：　困りごと相談会もやっているが、２か月前にスマホでここがわからないと言ってきたおじいさんが、しばらくすると自分で写真を撮って持ってきて勉強会に行ったらこんなことができるようになったと話していた。１回切きりではなく何回か開催される講座が良いようである。

委員：　あとはヘルプデスクなどを設置してわからなかったらすぐに教えてくれるような体制がないと、すぐに忘れていってしまうかもしれない。

委員：　文化センターに何でも聞ける窓口のようなものがあるといい。

会長：　社会福祉協議会の困りごと相談会はあくまでも福祉の分野であるが、生涯学習に関する相談窓口のようなものが生涯学習センターに行かなくてもあればいいかもしれない。図書館はまさに司書がいるため、それと同じようなものが文化センターにあるといい。最終的には生涯学習センターの話に持っていかなくてはならないので、文化センターにあればいいなというのをうまく生涯学習センターとして、出前相談受付のような感じで回っていき毎週何曜日に生涯学習センターの職員がいるということもありえるかもしれない。

委員：　それを仕組みとして、リアルに作りこむか、オンラインで作りこむかは検討が必要になる。

会長：　大事な点である。オンラインでやれることができてくると地域の拠点は何をしたらいいのだろうかということも考えなくてはならない。学習そのものはみんなで集まってやる方がオンラインより楽しいと思う。

委員：　パソコンで絵を描く講座を生涯学習センターでやっていた。生涯学習センターにはパソコン学習室があり、デスクトップパソコンが１０

台ほどある。そこで受講した人たちが今はグループを作って毎月集まってプラッツの会議室で活動している。最初のスタートであるデスクトップパソコンを何台も揃えるというのは文化センターではできず、生涯学習センターでしかできないことであり、来た人はそこで学ぶ。ただ、そこでずっとやっていくわけにはいかないので、学んで、各自でパソコンを持ち込んで定期的に別の場所で活動する。その後は人数が多くなって、団体を東西の文化センターで分けるようになるかもしれない。その団体の人たちはすでに習っている人達でパソコンは各自が持ってくるため、パソコン教室でやる必要はない。明らかに生涯学習センターで習ったことと、各文化センターでやることは違いがある。

会長：　生涯学習センターで習ったことを近くの文化センターで活動として行うという流れはいいことである。

委員：　生涯学習センターの廊下を通ったときは、スペイン語やイタリア語など多くやっている。その人たちもずっとそこでやるわけではなく分散してくものである。語学系の講座を地域でやっても興味があるのはせいぜい数人で、きっかけとなる講座を生涯学習センターでやるから人が集まる。その中でどんどん派生していく印象がある。そのため、生涯学習センターの役割というのは確実にある。その期間だけやるということであれば多少不便でも生涯学習センターに訪れて、その後は自宅から近いところでということになる。

会長：　生涯学習センターで学んだ人たちの中でさらに学びたいという人たちが集まって、地域的に近ければその近くの文化センターで活動することもできる。

委員：　そうすれば地域の活性化にもつながる。また、高齢化の話だが、私も所属した山を楽しむ会や、テニスの団体など何個か潰れている。やはり高齢化は深刻である。ただ、先ほどのパソコンの会は潰れた団体と同じ年齢層である。高齢者は山を登ったりはできなくても、そういったところで出来ることはある。昔文化センターで英会話の活動をしていたが、今は当時のメンバーはいない。では、そういった活動団体がなくなったかというとそうではなく、その文化センターで活動している英会話の団体が３つに増えていた。このように、英会話のような内容であれば高齢化して辞めていっても、新しい人が入ってきて新陳代謝していくものである。ところが、山やテニスはその中に若い人が入ってこないので、メンバーが固定されてしまい、高齢化になると消えていってしまう。全部が無くなっているわけではなく、テーマ次第

で消えていくものも、増えていくものもある。スマホの使い方に限らないが、必要な人は受講すればいいし、必要ない人はやらなければいいもので、あまり上からあれこれ内容について言われるのは生涯学習とは違うのではないか。

会長：　若い人たちの中でも必要があれば自分から学習をしているということかと思う。

委員：　我々が支援するとしたらどういう側面から支援したら良いのか。

委員：　私は場所と設備の提供であると考えている。生涯学習センターがあの場所であの台数のパソコンを揃えることを他の施設ではできない。音を出す活動というのも専用の部屋がないとできない。そういった場所を提供することが市の役割である。テーマを言うよりもみんながやりたいことに設備を提供してあげることが重要である。

委員：　やみくもに設備を揃えるのではなく、人の興味ややりたいことを推測しながら整えていく必要があるので、そこが難しいところである。

会長：　生涯学習センターは人が来ないと困るのでニーズをできるだけ把握しようと努力している。ただ、それをやった後のフォローとして文化センターにつなげていくことまではできていない。それは生涯学習センターの役割の一つと考えることができる。

委員：　スマホについても、必要な人、必要になった人がちゃんと受けられるようになっていればいいのではないかと思う。

委員：　必要がないからいいということでは無く、必要性というのは、何かのきっかけから生まれてくるものなので、そのきっかけを与える作業はしなくてはならない。

会長：　これまでの意見を整理させていただく。地域の拠点としての文化センターがこれからの生涯学習にとってどこまで必要なのかという疑問はある。それは、例えば、全部オンラインで良いのではないかというところである。そこまでは世間も割り切ってはないと思うので、そういう意味で家から歩いていける範囲のところで人が集える場所があり、そこで必要なことを学べ、自分がやりたいことができるという場はこれからも府中市としては残していくべきということは前提として持っておく必要がある。そうなったときに現状はどうなっているかを見たときには、貸館機能での文化センターとしては稼働率が高いが、

実際の利用者からみると高齢化が進んでいて、特に若い世代の参加が少なくなっている。それは今ある団体に新しい人が入ってくることもそうだし、そもそも新しい団体ができて若い人たちがその場所を使う例は多くないので、そこを増やしてもいいのではないか。ただ、そうするためにはどうしたらいいかというのが１つ課題である。それと関連して、そもそも文化センターに馴染みのない若い人が多い。それはなぜかというと文化センターでやっている企画そのものが若い世代向けになっていないというところで文化センターのあり方、企画の内容を考える必要が出てきた。次に、生涯学習センターとのつながりや関係はどうかという点である。生涯学習センターで企画講座が行われて、その講座に参加した人たちが継続して学びたいときにその場となるのが、近くの文化センターという流れは今後もっと作っていった方がいい。それから、文化センターがより近いところにあるという意味でいうと、社会福祉協議会がやっているような困りごと相談会のような生涯学習の相談窓口が生涯学習センターだけでなく文化センターにも必要ではないかという話もあった。また、文化センターで行われている事業自体の魅力も考えていかなくてはならないが、今の体制では厳しいので、生涯学習センターから出前講座をしたり、募集したりして生涯学習センターが先頭に立って文化センターの企画の活性化に役立つこともできる。これらのことが今日の議論で出てきた意見かと思う。

副会長：　極端な話、生涯学習センターを利用する際のインセンティブをもっと取ってもいいのではないか。各学習内容は未来永劫続けていくわけではないので、学びのライフサイクルを考えていくことも必要で、学びの内容毎に何を残して何を無くすのかを考えてもいい。税負担率にしても、今は５０％ほどである。我々の若いころと今の人たちの感覚には違いがあり、今の人たちを取り込むにはそれ相応のインセンティブが必要ではないか。また、何が学びなのかというところはより分解して考えてもいい。様々な思いがあって学びという言葉を使っていると思うが、少し曖昧になってしまう懸念がある。

会長：　本日は文化センターから考えて生涯学習センターは何ができるかというところまで簡単に話をした。次回以降どうするかはまた考えていくが、大きな流れとしては資料５の②の部分も審議する必要がある。副会長からもあったが、学びの中にも、必要に迫られてやるものもあれば、楽しい知的・身体系のもの、地域の課題解決に向けたものなど様々である。そういった中で生涯学習センターが他施設との連携をどのように行なっていくべきかである。学びの定義について皆さんと話す回を設けた方がいいかもしれないが、抽象的な話ばかりをしていて

もしょうがないので、具体的な話もしていきたい。文化センターをもっと掘り下げるのか、違う観点から話すのかは正副会長で検討したい。

委員：　興味は人それぞれなので学びについて定義は無いのではないか。

委員：　多様性は原則として、その中で我々がどこをサポートしていくかということである。自分でできる人には必要無いが、そうではなく、やりたいことはあるができない人や、仲間を作りたいが中々できない人達へどう手を差し伸べて、必要なことを提供し、サポートしていくかというのがつながりの中の助け合いである。

会長：　まさにその通りで、次回の審議のきっかけになるかと思う。市として何について、どのようにサポートしていったらいいのかを考えていければと思う。

６　その他

⑴　本審議会から府中市図書館協議会委員として推薦する者を決定した。

⑵　次回の審議会の開催時期について、令和６年４月２６日（金）の午後２時からおもや４階第１特別会議室にて開催することで、了承を得た。